沖縄県南部圏域
地域リハビリテーション
広域支援センター 広報紙

リハビリちゃんぷる

第7号

特集記事

●失語症コミュニケーション講座
●西原町「いいあんべ～家」
●行って来ました！
久米島・南大東島
●南部広域支援センターの活動紹介

設置の目的

わが国は諸外国に比べられない程のスピードで高齢化が進んでいます。しかし、高齢者や障害者が住み慣れた地域で暮らし続けるために必要な地域ケア、地域リハビリテーションの体制は整っていないのが現状です。そこで、国の音頭で、各県が『地域リハビリテーション支援体制整備推進事業』を五年前から進めています。沖縄県は【北部・中部・南部・宮古・八重山】の五圏域ごとに地域リハビリテーション広域支援センターが指定されています。

広域支援センターの役割

目標／高齢者や障害者およびその家族が住み慣れたところで、そこに住む人々とともに、一生安全に生き生きとした生活が送れる。

そのためには、あらゆる人々や機関・組織が協力し合うことが必要です。広域支援センターはそのための支援を行います。具体的には次の三つの活動を行います。

『直接的援助』

地域ケア・リハビリに必要なリハビリ専門職などを講師として派遣したり、研究会を開催することで関係する職員の資質向上に協力する。

『ネットワークづくり』

地域の医療機関や介護サービス事業所、福祉保健所などが協力・連携し、必要なサービスを適確に提供できる体制をつくる。

『住民への働きかけ』

地域社会がこれらの問題を受け止め、支えていくことが可能となるように一般の住民に働きかける。

失語症コミュニケーション講座より

当センターで開催した講座内容の一部を紹介します。

【失語症とは】

「失語症」は脳卒中や頭部外傷などが原因で、ことばを話したり理解したりすることが不自由になる後天的な言語障害です。ほとんどの人は左側脳障害によって起こります（麻痺は右半身になる）。

しかし、周りの状況判断や人を思いやる気持ちは保たれますので、子供扱いするのは厳禁です。私たちが「ことばのわからない国に旅行している」状況に似ていると言えます。身振りや絵図などをつかうと理解しやすい方が多いので、ことば以外のコミニュケーション方法を充分に活用しましょう。

「話す・聴く・書く・読む」ことが障害されますが、人によって症状の程度はさまざまです。相手を尊重し、「相手のことを知りたい」という気持ちが大切です。できるだけ「①ゆっくり、簡単に、②身振りを交えて、③絵や字を書く、実物を見せる」ことが有効です。「無理に言わせる／無理に書かせる／むやみに励ます／誤りをいちいち訂正する」などは逆効果です。

（参考文献：地域ST連絡会議「失語症の人と話そう」中央法規　二〇〇四年）

【失語症者をとりまく不自由な環境】

残念ながら失語症者をとりまく状況は充分ではありません。失語症者は「ことばが不自由である」だけでなく、失語症のこと自体が理解されておらず、利用したいケアや訓練のサービスも充分にない状況にいます。

これを改善するためにはさまざまな取り組みが必要になります。全国的には一部始まっていますので、沖縄県でもこれからの取り組みを期待したいと思います。

【失語症者のケアを向上させるための全国・県内の活動】

■会話パートナー養成講座
失語症者と上手なコミュニケーションをとる方法を学び、失語症者の社会参加を助けるボランティアの養成も行っている。

■友の会活動
各県に「失語症友の会」があり、全国連合会もあります。沖縄県にも（社）沖縄県脳卒中等リハビリテーション連絡協議会に失語症部会（ゆんたく会）があり、積極的な活動を行っています。また平成十七年六月十一～十二日に全国失語症者のつどいが沖縄コンベンションセンターで開催されます。ゆんたく会と沖縄県言語聴覚士会のみなさんが準備を進めています。

■失語症デイケア（デイサービス）
失語症者を対象としたデイケア（デイサービス）も少しづつ増えてきました。

■沖縄言語聴覚士会

ゆんたく会連絡先：大城栄徳・貴代子　886－2434
http://yuntaku.main.jp/index.htm

■講議風景
真剣な表情で講師の話しを聴く受講生の方々

■失語症者との会話演習
受講生３名、ST１名、失語症者１名の５名ごとのグループに分かれて行われる。

演習が進むと、失語症者の方に笑顔がみられた。

西原町「いいあんべ～家」運営事業

平成十五年四月にオープンした「いいあんべ～家」では、西原町民（四十歳以上）の介護予防健康づくり（太極拳・卓球教室・手工芸）、機能訓練に関する事業や地域いいあんべ～共生事業の情報発信を行っています。

事業内容
○皿圧測定などによる健康チェック、健康相談等に関すること
○各地区実施のいいあんべ～事業の拠点としてふれあい事業に関すること
○高齢者生活改善事業に関すること
○家族介護者教室に関すること
○機能訓練事業に関すること
○福祉・保健・医療及び介護についての啓蒙啓発活動に関すること
○高齢者のレク、趣味活動の普及に関すること
○介護予防等における地域ボランティアの育成に関すること
○その他各種介護予防事業に関すること

【機能訓練室】健康器具などを百円で三器使用できます。
利用可能者／西原在住で四十歳以上
利用時間／午前九時～午後五時
休館日／毎週水曜・祝日・年末年始

【多目的ホール】介護予防、趣味活動の普及の為の教室を随時開催、ホールの使用も可能（要予約）

地域の介護予防及び健康づくりの拠点として「いいあんべ～家」には、一日平均四十人前後の方が利用しており、担当の与那覇さん、玉那覇さんは利用者の意見を伺いながら新たな教室の開催等に楽しく取り組んでいました。

行って来ました!! in 久米島 in 南大東

久米島町機能訓練事業（リハビリ教室）

大浜第一病院　理学療法士
仲田　多津子

久米島の機能訓練事業に参加し始めて五ヶ月がたちますが、今までしてきたこと、感じたことを考えてみました。今思えばあまり深く考えず、見方も違っていたと反省しています。

今まで入院患者様を対象に治療してきた私にとって「機能訓練事業」は、とても新鮮&驚きの連続でした。まず、利用者の方それぞれが違うニーズを持っているのです。“治療”を求める人も中にはいますが、ほとんどの方たちが治療を求めていません。“仲間づくり”すなわち“社会活動参加へのきっかけ”として来ているのです。その中での会話として、症状に困っている悩み相談を受けることがある程度です。

それに加えて、主催者である保健師の要望があります。当たり前のことですが病院での治療とリハビリ教室の大きな違いは理学療法士と利用者（患者）が一対一ではなく“グループ”であることです。異なる疾患・症状であっても、同じ場・時間で同様のサービスをすることです。

利用者や保健師が「何を求めているのか。何を行えばよいのか」。これが今の私の最大のテーマです。これを見つけるのはやりがいのある面白いところですがとても難しいことだと考えます。

なぜならば利用者側、主催者側からみた理学療法士に対する要望も違うし、離島のために保健・医療・福祉の環境（資源）も限られているからです。（理学療法士を“療訓練を行う医療技術者”としてではなく、運動やレクをする一人としてみている利用者も多いと思う。）

これからは様々な利用者や関係者と話し合うことから始めて、勉強して考えて、この大きなテーマを自分のものにしていきたいと考えています。

南大東村機能訓練事業（リハビリ教室）

大浜第二病院　理学療法士
糸山　太一郎

平成十六年度の南大東村における訓練事業は三回の計画であり、十月に二回目を終了しました。今回はその内容と感想を報告いたします。

一泊二日での訪問リハビリと、脳卒中片麻痺後遺症や腰痛のある方に対する個別指導を行いました。対象者は二十～八十歳の十五人程で症状も多様でした。

南大東島には入院施設はなく（診療所のみ医師一名、看護師一名）リハビリ教室に訪れた方たちは介護サービスを利用しながら自宅で“生活”していました。症状や動作能力を見ると、入院していてもおかしくはない方もいました。

私は以前、東京都内で訪問リハビリに携わっていたのですが、入院後さらにADL能力に差が出ること、入院することで生活能力を奪ってしまうことがあるのではないだろうか?と痛感しました。病院の利点と問題点を改めて考え、入院した患者様が“治った”だけでなく“生活できるようになった、元気になった”と言えるよう、リハビリテーションの基本から見つめ直して行こうと改めて気を引き締めました。

余談になりますが、関東出身の私は六月に沖縄に転居したばかりで、高齢の患者様の方言に「??」となってしまうことがあり、今回の南大東島訪問も心配していたのですが、軽いウチナーグチが二、三名でほとんどの方は標準語でした。それは島に人が住みはじめて百年で、多くは小笠原や八丈島からの開拓者だからだそうです。なるほど!

南大東島への訪問は楽しく大変勉強にもなっています。良い機会を与えてくださってありがとうございます。次回三回目は一月に行く予定です。今から楽しみでその日を待ち望んでいます。

南部広域支援センターの活動紹介

直接的援助

■介護教室
南風原町（九月十七日、二四日）
浦添市（十月二九日、十一月五日）
与那原町（十一月六日）

■渡嘉敷村デイサービス（毎月一回）

■機能訓練事業
南大東村、久米島町、那覇市、浦添市

■その他の活動
渡名喜村健康運動教室
渡嘉敷村膝・腰痛教室
座間味村ホームヘルパー指導
老人ホーム実地指導　など

■研修会
『失語症コミュニケーション講座』（九月十二日、十月二日、十一月二八日）
『終末期リハビリテーション』講師／大田仁史先生（茨城県立医療大学）（十一月十七日）
『訪問リハビリテーション』（十一月二二日）

ネットワークづくり

地域においては、訪問リハビリや通所リハビリ、市町村のリハビリ教室などに加えこれからは介護予防や健康増進活動にもリハビリ技術の応用が期待されています。また、老人ホームの利用者に対するケアにもリハビリの立場からの関与が求められています。

しかし、地域におけるリハビリ資源の量は充分ではなく、かつ個々が独立して存在しているため、地域リハビリテーションが推進されにくい状況があります。そこで散在する地域のリハビリ資源と保健・医療・福祉関係者を結び付け、協力・連携する体制を築く、すなわち『地域リハビリのネットワークづくり』が重要になります。

当広域支援センターでは『地域リハビリのネットワークづくり』を目的にリハビリ資源の調査を行っています。調査内容及び集計結果は十二月中にみなさまに供覧する予定です。

現在の離島支援

●久米島町
大浜第二病院・新垣栄子
大浜第一病院・仲田多津子

●渡名喜村
沖縄リハビリテーション学院・天願博敦
大浜第一病院・岡本慎哉

●渡嘉敷村
大浜第一病院・岡本慎哉

●南大東村
大浜第二病院・糸山太一郎

以上が実践活動を行っており、地域に貢献しています。

編集後記

今年二号目の広報紙では、市町村を訪ねて、みーんなが「ホット」になり、頑張っている様子がうかがえます。少しでも当センターの活動が皆様のお役に立てたらと思います。

また、広報紙をお読みになり、ご意見、ご感想などございましたら、当センターまでお寄せください。

発　行　者／沖縄県南部圏域地域リハビリテーション広域支援センター
発　行　日／2004年12月5日
発行責任者／石井　和博
住　　所／〒902-8571
那覇市安里1-7-3
（大浜第一病院内）

ホームページも新しくなりました！
http://www.omotokai.or.jp/nanbu
tel.941-2028　fax.941-2029